

実践女子大学空間デザイン研究室 2019 年度卒業論文

■こどもの「日常生活」を支える保育環境

東京都認証保育所の W 園は、定員 35 人の小規模な保育所で、園庭はなく、園舎は家庭的な環境を意図してデザインされている。数日にわたって参与観察調査を行った。園内外での子供たちの生活の場面を、時間断面では無く、一連のまとまりのあるエピソードとして記録した。通常の保育を行う保育所と比較することで、生活の「日常性」を重視した保育の特徴を明らかにする。

比較対象とした保育所では、さまざまな生活場面は基本的に、保育スタッフによって設定され、時間・場所・プロセスなど、プログラムされた内容に従って遂行される傾向が見られた。ここでは「プログラム型保育」と呼ぶ。

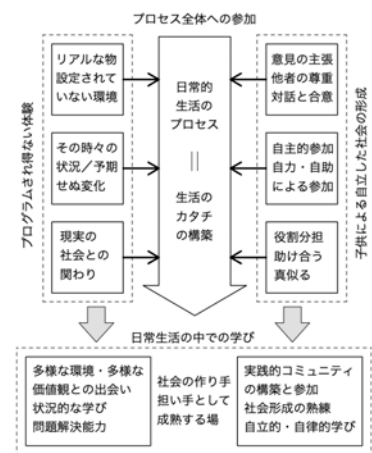
これに対して W 園では、子供自身が生活のプロセスに主体的に関わり、リアルな物や環境に触れ、あるいは他者と出会い、突発的な出来事に遭遇しながら、子供たち同士

で意見を出し合いながら、柔軟に生活の場面を作り出す様子が特徴的であった。こうした保育の形を、日常生活の定型性と非定型性を併せ持つ「日常型保育」と呼びたい。

「日常型保育」においては、生活プロセス全体においてプログラムされていない体験を伴うこと、そして、子供による自立した社会の形成を伴う形でそのプロセスに関わることで、という 2 つの側面が大きな特徴として見いだされた。子供にとっての学びの特徴は、形式化された知識や技術、社会性の獲得を目的とするのではなく、より状況的・実践的・主体的な学びの形であった。多様な構成員からなるコミュニティの中で、子供自身がその社会の作り手、担い手として熟達していくことを促す保育環境と言えるのではないかと。

(表 1-1) 日常型保育とプログラム型保育

	食事	昼寝	散歩	遊び	行事	異年齢交流	地域交流	喧嘩
日常型保育	食材や調理を園児が手伝うこともある。配膳は各自で行う。大人と同じ食器を使用。食事の時間は臨機応変で、揃わなくても順番に食べることもある。片付けも基本各自。年長児が率先して行い、年少児は真似をする。	食事が終わった後、園児から、自分で準備をして昼寝する。目が覚めた園児から、周りに気をつけながら起きだし、遊び始める。	散歩の場所はみなで話し合ってから決める。途中で目付いた場所まで遊んだり、行き先を変更することもある。	年齢に関係なく、自分たちの興味やその場所の特性に従って、そこにあるモノを使って、それぞれが自由に遊ぶ。その場で工夫して、新しい遊びが生まれることもある。年長児と年少児が自然に関わりながら、遊んでいる。先生は基本的に見守る立場。	子供たちの意見を聞いて、多様な形のイベントが行われる。一人ひとりの誕生日に、その子向けの誕生会を行う。	ふだんから異年齢と一緒にいて、遊んだり出かけたりの年長児も年少児もそれぞれ自分の意見を言う。年長児が年少児を自然と世話したり、年少児が年長児の真似をしたり、が起きている。	散歩に出かけた際に、地域の人に話かけたり、地域の人の生活に偶然触れたりする。他の園児が提案を行うこともある。	喧嘩が起きますと、園児たちが自分たちでその原因を探り、話し合いを行って解決する。他の園児が仲裁に入り、それぞれが納得できるような提案を行うこともある。
プログラム型保育	調理は専用の厨房で調理師のみで行う。配膳は子供たちの当番制。年齢別の子供向け食器を使用し、一人分の食事をトレイに載せて配膳。全員揃っていただきますとして食べ始める。片付けは、先生の指示で全員で行う。	食事が終わった後、全員で着替える。布団を準備する。昼寝の時間、起床の時間は決まっている。	決まった場所、決まったルートに従って先生が主導して外出する。目的地を途中で変更することはない。	年齢ごとにできるようになる目標があり、段階を踏んで高度な遊びへと移行する。そのための遊具や環境が準備されている。先生が園児たちを主導して遊ぶことも多い。やっというかないことが決められている。	目的のはっきりしたイベントが年間行事の中に組み込まれている。誕生会は、月ごとにとまるとして行う。	異年齢で触れあう時間が決められており、交流する。年長児は年少児の世話をするという役割をする。その時間が決まっている。	地域交流のための機会が定められており、その時に定められた人と交流する。交流の中身も事前に決定されていることが多い。	喧嘩が起きますと、まず先生が止めに入る。園児たちから事情を聞いた上で、とにかく仲良くしましようということ前に決定されていることが多い。



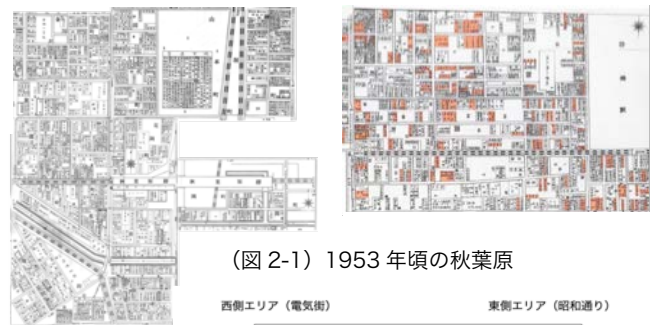
(図 1-2) 日常型保育の構造

■秋葉原の移り変わりと住民生活の変化

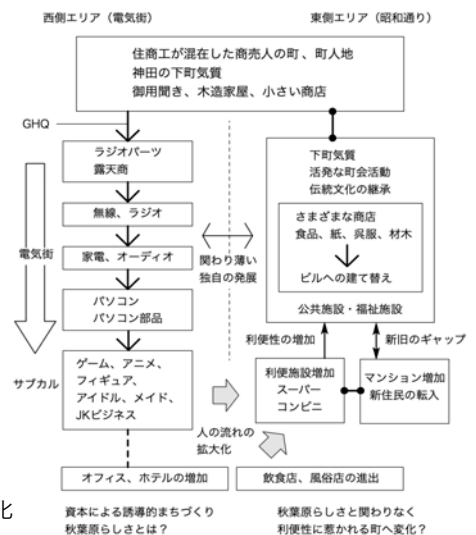
「秋葉原」の街は、東京でも有数の有名スポットであり、街の発展・変化も激しく、電気街からサブカルチャーまで、多くの視点で語られている。しかし住人の視点から語られることは少ない。秋葉原の変化を追いつつながら、秋葉原住人の声を拾うことで、「生活の場」としての秋葉原に注目した。

秋葉原の変化を見ると、もともと住商工の混在した町人地だったが、山手線を挟んだ両側の地域でその様相は大きく異なる。西側エリアは、無線やラジオのパーツ屋から家電・パソコンへ、現在はゲームやアニメ、アイドルなどのサブカルチャーの街へと激しい変貌を繰り返す。一方で東側エリアは、建物はビル化が進みながらも、居住者は大きく変わらず、かつての下町気質を残している。近年、マンションやオフィス、ホテルの増加に伴い、新規住人や通勤者、旅行者などが急増し、人の流れが変わり、街の様子も次第に様変わりしている。

居住者のヒアリング結果からは、西側エリアのめまぐるしい変化は、生活に大きく影響はしておらず、むしろ東側エリアの新規居住者が増えたことによる、利便性の向上と新旧住人のギャップが指摘された。居住者が代替わりする中で、これまで残存した「街らしさ」は薄れつつある。



(図 2-1) 1953 年頃の秋葉原



(図 2-2) 秋葉原東西両エリアの変化

■縁側の魅力とこれからの姿

「縁側」は日本家屋の伝統的な要素の一つであり、室内と室外の中間領域として、物理的にも社会的にも両者をつなぐ役割をもつ。ハウスメーカーが供給するような住宅からは縁側は失われて久しいが、近年の住宅事例では、住宅と外部をゆるくつなぐ「縁側の」役割を目指した空間が見いだされる。新建築住宅特集 15 年分に目を通し、「縁側の空間」を有する事例 (221 事例) を抽出し、その分類を試みた。

住宅内部と外部との関係性により、従来の縁側に地階タイプを含め、6 種類に分類された。住宅の外に広がるまちに対して、住宅内部からどのように認識がされるのか、まちの側から住宅の内部の様子がどのように認識されるのか、まちと住宅との距離感やその双方向の関わりの強さによってタイプ分けを行った。いずれも、住宅内に外を感じさせる居場所を提供しつつ、外に存在する他者との間に多様なレベルの関わり方を提供するものと考えられた。

従来の縁側空間とは形態は異なるが、敷地状況や周辺環境に応じて、さまざまなタイプの縁側の空間が存在していた。縁側の空間を通して、住宅とまちとの間に適度な距離を持たせながら、外に向けて生活感をあふれ出すことで、まちには単なる視覚的な景色ではない、人と人との間接的な関わりに裏打ちされる「生き生きした」景観として感じられる風景を作り出すことに寄与するのではないかと。

■武蔵小杉再開発の経緯と課題

川崎市武蔵小杉は、近年大規模な再開発が進められ、多数のタワーマンションが林立する新しい街へと変貌し、「住みたい街ランキング」の上位にも選ばれている。一方で、交通渋滞やインフラ不足など、地域の問題を引き起こすなど、一方的な開発に伴う歪みも言及されている。かつてただの乗り換え駅だった武蔵小杉がなぜ大きく変貌したのだろうか。

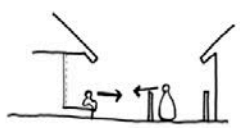


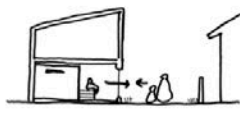

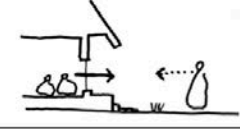





武蔵小杉駅周辺は、昭和 40 年代では、さまざまな企業の工場およびその社宅が多くを占めていた。バブル期に川崎の副都心として位置づけられ、再開発計画が持ち上がるも、バブル崩壊によりいったん頓挫する。駅前の工場が地方に次々と移転し広い敷地が誕生。2000 年代に入ると、都市の高度利用化を目指して容積率が次々と緩和され、日本全体にタワマンブームが訪れる。川崎市も武蔵小杉駅周辺を高度地区に指定し、民間主導による開発を進めるために、さまざまな制限を緩和。湘南新宿ラインが開通して利便性が増した立地の良さも生かし、2008 年以降、タワマンラッシュを迎えることとなった。現在はタワマン 14 棟を含む 21 棟もの超高層ビルが建ち並んでいる。

民間主導により経済優先のまちづくりの結果、商業施設などの利便性は向上したが、交通渋滞、地域のインフラ不足、ビル風、新旧住民のギャップなど、地域的な計画の視点不足による多くの問題が顕在化している。そこには、地域のさまざまな主体の協力関係による、主体的で持続的なまちづくりを目指すという、川崎市の将来像とは乖離した姿がある。

■日野市地区センター図鑑

日野市内にある 66 カ所の地区センターをすべて訪れ、1 冊の図鑑を作成した。日野市に 150 部寄贈。

(表 3-1) 縁側の空間の分類

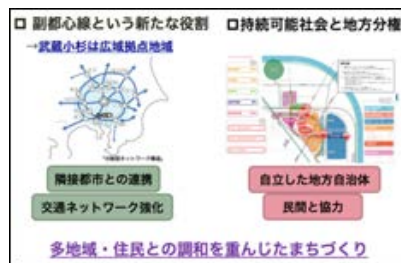
	<p>〈タイプA〉33 事例 従来の縁側空間 広い敷地を持ち、生垣や低い塀を超えて通行し、人々や、知人と関わりを持つ。外と内の出入りが可能である。</p>	
	<p>〈タイプB〉68 事例 屋外の縁側の空間 非日常を味わうことが出来る空間。街の休憩場となることができる。外と内の関わりがダイレクト。</p>	
	<p>〈タイプC〉13 事例 対等な視線で関係の縁側の空間 外を内に入れ込むことで、二つの関係性が対等になることができる。外に閉じる・開くが調節が容易。</p>	
	<p>〈タイプD〉23 事例 外と距離を持つ縁側の空間 内と外に平面的な距離を取ることで、内は自分の居場所を確保しつつ、外には生活の世界が漏れ出す。</p>	
	<p>〈タイプE〉33 事例 内が外に向かう縁側の空間 住宅街に存在する家は樹と立体的に距離を置きながら内の自分の居場所を確保する。</p>	
	<p>〈タイプF〉51 事例 高低差縁側の空間 敷地を利用して距離感を持たせる。内は街を、外は内から漏れるへ気配を風景として楽しむ。</p>	



(図 4-1) 武蔵小杉の現状



(図 4-2) 1960 年代



(図 4-3) 川崎市のマスタープラン

